

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 柏歴史クラブ代表上山和雄編著『柏にあった陸軍飛行場：「秋水」と軍関連施設』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神山, 知徳, Kamiyama, Tomonori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000259

〔書評〕

柏歴史クラブ代表 上山和雄編著

『柏にあった陸軍飛行場―「秋水」と軍関連施設』

神山知徳

一、はじめに

今回小稿で紹介する本書が刊行された平成二十七年（二〇一五）は戦後七〇周年にあたることもあり、新聞やテレビなど多くのマスコミで多くの特集記事が組まれてきた。各地

の博物館でも戦争関連の企画展示・特別展示が行われた。それは出版界でも同様で、特に初の本格的戦争辞典として『アジア・太平洋戦争辞典』（吉川弘文館）が刊行され、シリーズ『地域のなかの軍隊』（全八巻、同前）が完結している。

こうした節目の大きな動きとは別に、全国各地で官民間問わず地道な調査・研究活動が進められてきた。本書の刊行母体になっ

た柏歴史クラブ（二〇〇九年設立）もまた、「手賀沼流域とその周辺の歴史と環境の研究を行い、もってその地域の貴重な文化と自然の遺産を後世に伝えていくこと」を目的として、市民や研究者が中心となって見学会や研究会を開催し、会報を発行している。なおその代表には、國學院大學文学部上山和雄が就任している（以下敬称略）。

ところで本会は、つくばエクスプレスが開通し急速に開発が進む千葉県柏市北部で、異様な人工物を一つ一つ発見し、飽くなき探究心と行動力によって、本書の標題にもある柏飛行場とロケット戦闘機「秋水」に関わる新しい事実を明らかにしていた。さらに平成二十一年まで消防署の分署として使用されていたコンクリート製の建物が、馬の飼料を保管する「馬糧庫」ではなく、高射砲連隊演習施設の一つ（照空予習室及測遠器訓練所）であったとし、解体間近であったその建物の保存運動を進めるに至った。

軍関連施設の事実解明と保存運動を記録した同様の文献としては、近年では山田朗・明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界・風船爆弾・生物兵器・偽札を探る』（明治大学出版会、二〇一二年）がある。本書との違いを端的に言えば、それは出版の母体が、予算の裏付けのない

市民団体か大学の研究機関かにある。

二、本書の構成と内容

はじめに

第一章 飛行場開設前の柏と田中

第二章 帝都防衛と柏飛行場

第三章 「秋水」と柏飛行場

第四章 市域と周辺の軍関連施設

第五章 人々の語る戦争と柏

第六章 その後の柏飛行場

柏歴史クラブの活動記録

本書は、以上の六章立ての構成になっており、総説的な第一章・第二章・第六章は、上山和雄・栗田尚弥・櫻井良樹ら主に大学に籍を置く研究者が執筆している。第一章では近世の昭和戦前期の市域について歴史的背景を叙述している。

第二章では「戦局の推移と柏飛行場」「柏飛行場の整備」の二節を設けている。第一回関東防空大演習（昭和八年）以降民間を含めた防空体制の確立が強く認識され、特に埼玉・千葉・神奈川など「帝都」圏において、軍防空の充実が図られたとす

る。そのために迎撃用戦闘機による「帝都防空」の主役として、広大な武蔵野台地が広がる埼玉と千葉県に、幾つもの陸軍飛行場が建設されるようになった。柏市域周辺は、昭和二十年の敗戦までに、柏飛行場（現柏市）・松戸飛行場（現松戸市・鎌ヶ谷市）・藤ヶ谷飛行場（現柏市・鎌ヶ谷市）を抱えるようになった。特に昭和十七年四月十八日のドーリットル空襲は大本営陸軍部に大きな影響を与え、高射機関砲や対航空機レーダーなどが整備された。また東京周辺に展開していた飛行機部隊については、機種変更が急がれた。

また柏飛行場は昭和十二年の開設以来、整備と拡張が繰り返され、終戦時には当初の一・八倍に相当する約二六四haまで拡大されている。日本で最初にブルドーザーによる基地整備の研究試験場として選ばれたのも柏飛行場であった。

本書の中核をなす第三章は、「有人ロケット」「秋水」の開発」「呂號燃料」と柏」「秋水」燃料貯蔵庫の発見」「秋水」と学徒出身パイロット」の四節からなる。その執筆は「秋水会」という海軍三一二航空隊（通称「秋水隊」）で訓練を積んだテストパイロットが集う民間団体で事務局員をつとめる柴田一哉が、その豊富な知識を遺憾なく發揮し、叙述している。

その内容はかなり専門的で、門外漢、特に評者のような文科

系の者にとっては容易に理解しがたい。特に初の液体ロケットエンジンとなる「特呂二号」の燃料である「呂號燃料」の開発計画（本書九〇～九四頁）については、臆気ながらイメージするのに止まった。とても詳細を理解したとは言いがたい。するとなるほど、秋水実験部隊を編成するにあたっては、学生出身のパイロットが着任しており、海軍には操縦技術もさることながら、ロケットという最先端技術を理解できる教養を持った人員を配置する意図があった（同一一三頁）というの肯ける話である。

続いて第四章は「高射砲連隊と現存する建物」、「第四航空教育隊」、「松戸飛行場と藤ヶ谷飛行場」、「柏憲兵分遣隊」、「柏陸軍病院」、「柏忠霊塔」、「氣象技術官養成所」、「日立製作所と東京機器工業柏工場」、「兵舎に利用された学校施設」、「飛行場建設用軽便鉄道」の一〇節からなる。これらの執筆陣は柏歴史クラブ事務局長でフリーライターの浦久淳子、第一章・第二章同様に研究者の立場から、上山・栗田・櫻井と吉田律人からなる。

第五章は市民からの聞き取り（九名分）を載せている。その内容は「飛行場建設に従事」（昭和二十年四月時二十六歳）、「柏分廠に動員された中学生」（同十五歳）、「第四航空教育隊の思い出」（同二十一歳）、「ある日の陸軍氣象部柏氣象観測所」（同

二十一歳、「米軍機に狙われた飛行場」（同二十一歳、十八歳、十四歳、十三歳）、「小学生の見た戦争と柏飛行場」（同十歳）、「日立柏工場に動員された銚子商業学校の生徒たち」（同十三歳四名、同十五歳六名）の七節からなる。

ここで最も興味を惹かれたのは、銚子商業学校の生徒が日立柏工場に動員された時の事例であった。各学校から教師が派遣されていたが、たった三人だったので統制のしようがなく、生徒の要求を受け入れるばかりであったという。喫煙や飲酒も暗に認めており、食事改善のストライキすら起こすこともあった。その時はたまたま憲兵が不在で、工場ではこの事実をもみ消そうとしたという。さらに昭和二十年になると諸ばかりになり、物品倉庫から食糧や酒類、タバコなどを持ち出す生徒もいて、処分された。また差し入れられた食糧を野外で秘かに調理していたために、一度火災になり大騒動となった。周辺の畑から作物を取ってくることもしばしばで、罪悪感はなかった（同一八九—一九〇頁）。

このように銃後体制は末期になるとほぼ崩壊した状態になり、戦意はかなり弛緩していたとみてよい。日々の生活の防衛と維持に余裕がなくなり、戦争の苛烈化は人々の生活への関心を高めた。日中戦争以降の銃後社会を支えた高い戦意は、徐々

に失われつつあったのである。銃後社会の実態が、この聞き取りに如実に現れている。

最後に第六章は「敗戦と米軍の進駐」「飛行場の開拓」「トムリンソン基地から、柏の葉へ」の三節からなる。各標題が示すように、本土決戦が現実問題と意識され始め、帝都防衛の最前線として柏飛行場に多くの入夫が動員された。そして敗戦を迎え、米軍が柏飛行場に進駐した。その後不用な部分が返還されて大蔵省の管轄する国有地になり、その中で開拓可能な土地が農林省に所管替えになった。そして開拓者に払い下げられていった。軍用地に入植した人々は廃材の払い下げを受け、狭いあばら家で身を寄せ合って暮らした。そして昭和二十五年六月に朝鮮戦争が勃発すると、日米行政協定によって米軍への提供施設に転換され、通信施設が建設され、開拓地にアンテナポールが林立した。朝鮮戦争終了後も米軍の重要な通信施設として使用された（キャン・トムリンソン）。そして昭和五十四年に返還が通知され、昭和六十年に「柏の葉」と命名されて現在に至る。この地域は今では計画的な開発によって、整然とした区画と緑豊かな新しい柏を代表する地域になった。

三、本書の特徴

本書は、研究者ではなく市民が、その過半を占める一二〇頁超を執筆しているという点が特徴的である。そのため特に第四章は、市民向けに書かれた地域の歴史の掘り起こし、歴史ガイド的な側面が強い。さらに第五章では、市井の人々の当時の「記憶」（口述資料）を記録として残している。このように本書は、口述資料や歴史的景観も含めた、いわば「市民の手による歴史資料」の保存・継承運動の貴重な成果といえる。

四、おわりに

巻末の「柏歴史クラブの活動記録」を見ると、その活動の多くが戦跡調査と保存のための教育・普及・広報活動で占められている。特に廃棄されそうになった歩哨所については募金を呼びかけ、児童公園に移設・保存した。このような事例などは、地道ではあるが、保存活動の具体的な成果としてみるべきものがある。今後とも本会の精力的な活動に注目していきたい。

（A5判、二二八頁、芙蓉書房出版、二〇一五年五月刊、定価